

映画「渾身」のワンシーンより



錦織良成監督がプロデューサーを務める「劇団出雲」の初公演「あまいお告げ」コンピニ狂騒曲」が25日に出雲市平田町のショッピングセンターVIVAである。午後1時から午後4時半からの2回。当日チケットは一般1500円、高校生以下800円。

—— 錦織良成・映画監督
—— 第2、4金曜掲載 ——

今回もまたご協力いただいた皆さんの皆さまの名前がエンドロールにクレジットされる。ご支援に心から感謝しつつ作業を続けている。ご期待いただきたい。

「渾身」は最終作業に入り、エンドクレジットを入れるのみとなった。今回もまたご協力いただいた皆さんの皆さまの名前がエンドロールにクレジットされる。ご支援に心から感謝しつつ作業を続けている。ご期待いただきたい。

価値観の転換期に贈る心の映画「渾身」⑤

島根で撮影した映画の完成が間近に迫るといつも思いだすことがある。ご協力いただいた皆さんが初めてご覧になった時、感動が意外と薄い場合がある、ということだ。それは深く映画に関わっていただいた方ほど顕著だ。極端に言えばストーリーが分からなくなる人もいる。

映画「白い船」の地元試写の時「カットが短い」「物語が難しい」などの声が上がった。あまりの反応の悪さにかっかりしたのを覚えている。しかし日がたつにつれ、それが杞憂(きゆう)きゆう)だったことが分かる。一言でいえば地元過ぎて映画の中に入れないのが原因のようだ。

「渾身(こんしん)」は隠岐の島オールロケなので、映画が始まると地元の人たちなら誰も見慣れた場所や隠岐4島の景色が次々と出てくることになる。すると「あ、あそこが出た」とか「ここはどこだろう」...

思う存分ふる里探して

あ、あそこだ」などと知らず知らず心の中であそびだす。あら、あそこの誰それもおもしろいわ」とかエキストラの中に自分や親戚の人を探したりする人も多いだろう。そうこうしているうちにカットは変わり、場面も進んで行く。そのうち映画を見ているのかロケ地や人探しをしているのか分からなくなる、というわけだ。映画の脚本を読んでいる地元スタッフの方はなおさらだ。私たちスタッフもできる限りストーリーを忘れて、現場での出来事にも引っ張られずに編集作業することに努めているが、慣れていてもなかなか難しい。

映画「わさお」のお披露目の時最初に感動したシーンは、という問いに地元スタッフの一人が、冒頭の映画会社のクレジットで涙した、という話があった。もうその時点で映画として客観的に見られてはいない。白い船でお世話になった塩津のご婦人が4回目ですべて話の筋が分かったとおっしゃったのが印象的だった。

矛盾するようだが地元の皆さんには隠岐の島オールロケを満喫していただき、大スクリーンの中に思う存分知り合いを探していただきたい。そして、ふる里が映画になったことを心から喜んでいただければ、こんなにもうれしいことはない。何回かご覧いただこうちに、「筋」は必ず分かります(笑)。隠岐の島4島を舞台につづる映画「渾身」は最終作業に入り、エンドクレジットを入れるのみとなった。

今回もまたご協力いただいた皆さんの皆さまの名前がエンドロールにクレジットされる。ご支援に心から感謝しつつ作業を続けている。ご期待いただきたい。

錦織良成監督

映画の現場から

